

〔論 文〕

「古典派作家の言語」における無生物主語の lassen 使役構文

細 川 裕 史

I はじめに

「監督が、選手に早朝練習をさせる」、「コーチが、選手に好きなポジションを選ばせる」、「間近にせまった試合が、選手にやる気を起こさせる」……。日本語の使役表現では、意思を持つ使役主が主語となり、被使役主となる人物への行為の「要求」（「強制」使役や「説得」使役）や「許可」（「許容・放任」使役）を表すことができる（「母が子に旅行をさせる」など）。これらの表現においては、被使役主によっておこなわれる行為や引き起こされる事態に使役主である主語が「意図的に関わっている」（高見2011：136）が、その一方で、意思を持たない無生物が使役主となり、特定の事象が生じることを表す「原因」（「原因」使役）を示すこともできる（「プレゼントが彼女を喜ばせる」など）¹⁾。こうした使役表現に対応するのが、ドイツ語の lassen 使役構文である²⁾。

ドイツ語の使役構文は、例えば『メツラー言語辞典 (Metzler Lexikon Sprache)』では、「(他の) 使役主 (Verursacher) によって生じた最初の出来事や行為のゆえにおこなわれる行為を表す表現」(MLS 2016: 328) とされている。井出(2013)は、lassen の主語と目的語の「意思」の有無、そして lassen とともに用いられる動詞の「継続」性の有無に基づいて、lassen 使役構文の意味を「要求 (Auffordern)」、「許可 (Zulassen)」、「放置 (Lassen)」、「惹起 (Zustandbringen)」に分類している。「要求」と「許可」は、lassen の主語 (使役主) と目的語 (被使役主 = 文末不定詞の意味上の主語) が意思を持つ場合であり、使役主の意思のほうが強ければ「要求」、被使役主

の意思のほうが強ければ「許可」となる。「放置」と「惹起」は、lassen の目的語が意思を持たない場合であり、lassen とともに用いられる動詞が「継続」を表していれば「放置」、表していなければ「惹起」となる³⁾。

しかし、先行研究においては、意思を持つ使役主 (および意思を持つ被使役主) を用いたものを使役構文の典型例とする傾向が強く、無生物主語による「放置」や「惹起」の例は周辺的な事象として扱われている⁴⁾。例えば、使役構文の機能を「使役的要素 (kausativierendes Element)」と「許可的要素 (permitterendes Element)」とする Zifonun u. a. (1997a) では、使役構文の例を挙げる際に lassen と machen を用いた構文を併記し、主語が意思を持つ「人」を表す場合には lassen の例を、「人」が主語ではなく「使役」や「許可」とはいえそうにない場合には machen の例を挙げている⁵⁾。この著者たちは、machen を用いた使役構文を「めったに用いられない、文学的」(Zifonun u. a. 1997b: 1411) とみなしているにも関わらず、無生物主語の lassen 使役構文の代わりに例示しているのである。こうした傾向に異議を唱えたのが、湯浅(2015a 他)によるトーマス・マンの『ファウスト博士』を対象とした研究である。湯浅(2015a)によれば、意思を持たない事物が主語となる例が lassen 使役構文全体の4分の1以上をも占め、それらの例においては認知や状態変化の「原因・理由」が表されている⁶⁾。このことから、「使役」を内包するすべての表現を、「人」主語使役構文からの拡張と見ることには少なからず疑問が⁷⁾ (湯浅2018：4) 残り、「無生物主語 lassen 使役構文には、「人」主語の場合とは全

く別の意味構造を想定する必要がある」(湯淺 2016: 65) と、彼は指摘する。

本論の目的は、湯淺 (2015a 他) とは異なるコーパスに基づいて無生物主語の lassen 使役構文の用法を考察することで、彼の主張を検証することである。湯淺 (2015a 他) における一連の考察は、その根拠となるコーパスがマンの 1 作品によって成っており、そのため、調査結果がマン個人の文体的傾向である可能性が指摘しうるし、また小説のみが扱われているため「言語の使用領域の問題」(湯淺 2015b: 113) を明らかにできない。同様の意図に基づく研究としては、Eguchi (1997) が、先行研究で文学作品だけが扱われていることへの反省から、20 世紀の新聞における lassen 使役構文を考察している⁷⁾。本論では、しかし、以下の 3 つの理由から、新聞ではなく(小説を含む)「古典派作家の言語」を対象として調査をおこなった。第一の理由は、マンが生まれた 19 世紀において「古典派作家の言語」が書きことばの規範とされてきたこと。本論で扱うコーパスにもマンの文章と同様の傾向がみられれば、両者の関係が指摘しうる。第二の理由は、「古典派作家の言語」が規範視された 19 世紀が、識字率の向上やマスメディアの発展によってあらゆる社会階層に書きことばが広まった時期であること。したがって、コーパスにみられる言語的特徴は、教養市民層などの限定された社会層だけではなく、幅広い社会層によって受容されていたとみなせる⁸⁾。第三の理由は、データをすべてオンラインで入手でき、容易にデジタル・コーパスが作成できることである。

II 19 世紀の文法書における lassen 使役構文

コーパスの分析に移るまえに、19 世紀において lassen 使役構文がどのようなものとして理解されていたのかを示す一例として、2 冊の文法書における記述を紹介する。両文献はまた、当時のドイツ語文法がいかに「古典派作家の言語」

の影響を受けていたのかを示す例ともなっている。「古典派作家」を模範とし、彼らが「書いているように書け」という基本原則が垣間見られるのである⁹⁾。

19 世紀の著名な文法家ハイゼ (Johann Christian August Heyse, 1764-1829) は、その著書『理論的実践的ドイツ文法あるいはドイツ語の手引き (Theoretisch-praktische deutsche Grammatik oder Lehrbuch der deutschen Sprache)』において、lassen を話法の助動詞として扱っている。彼は、話法の助動詞の意味を「可能性 (Möglichkeit)」に関するもの (können, dürfen, mögen) と「必要性 (Nothwendigkeit)」に関するもの (müssen, sollen, wollen) に分け、lassen が話法の助動詞として使用される際の機能を以下のように述べている。

可能性の意味においても必要性の意味においても、それが主語の意思に依存している場合にすぎず lassen で表すことができる。したがって、許可 (Zulassung) や命令 (Befehl)、指示 (Anordnung) においてのみ使用される。例えば、„er ließ den Dieb laufen; er ließ ihn hinrichten“ (彼は泥棒を逃がさせる、彼はその男を処刑させる)。(Heyse 1838: 664)

ハイゼは、現代の文法書で挙げられている「使役的要素」と「許可的要素」という lassen 使役構文がもつ 2 種類の機能を、「必要性」と「可能性」という表現を用いて説明しているのである¹⁰⁾。この箇所では自作と思われる例文しか挙げられていないが、同書ではしばしばゲーテやシラーの作品からの引用がみられる¹¹⁾。

また、19 世紀に版を重ね広範に読まれたベッカー (Karl Ferdinand Becker, 1775-1849) の『ドイツ語学校文法 (Schulgrammatik der deutschen Sprache)』においても、lassen 使役構文はハイゼの著書と同様に、話法の助動詞の一例として扱われている。ベッカーは話法の助動詞について述べた節において、können, dürfen, mögen,

müssen, sollen, wollen とともに *lassen* をあげ、
 „Du darfst sprechen. Er kann schwimmen. Er kann nicht (schwimmen). Ich mag den Wein nicht (trinken).“ (Becker 1852: 82 君は話してよい。彼は泳げる。彼は [泳ぐことが] できない。私はワイン [を飲むこと] ができない) と、おそらくは自作の用例を示している。その後、ゲーテの『エグモント』やシラーの『ヴァレンシュタインの死』など、ゲーテの作品から 2 例、シラーの作品から 3 例、話法の助動詞が含まれる文を引用している。この手引きにおいても、文法について説明する際にしばしば、この両名の文章がその典拠になっているのである。そして、*lassen* 使役構文に関しても、ハイゼと同様に「可能性 (Möglichkeit)」と「必要性 (Nothwendigkeit)」という観点から以下のように説明したうえで、その用例として『ヴァレンシュタインの死』などシラーの作品から計 6 例を挙げている。

助動詞 *lassen* は、精神的な可能性 (許可 [Zulassung]) も精神的な必要性 (命令 [Befehl]) も表すことができる。その他の話法の助動詞との違いは、主語自身による行為ではなく目的語の行為に関する法を表す点であり、その行為が主語によって許可された、あるいは命令されたものであることを示す。(Becker 1852: 85)

これらの文法書では、意思を持つ使役主が主語となるケースだけがとりあげられており、無生物主語の *lassen* 使役構文は度外視されている。無生物主語を用いた構文を学校文法が無視しているという事実から、当時の人びともまた今日と同様に、*lassen* 使役構文に関しては「人」主語のものがもっぱら想定されていたと推測することができる。Ide (1996) によれば、「許可」と「放置」に分類される例はすでに中高ドイツ語の *lâzen* にもみられたが、無生物主語をとる

例 (「原因 (Ursache)」) はきわめて稀であり、また、そこには擬人法など使役主が意思を持たないとは断定できない例も含まれていた。無生物主語をとる例が少ない理由としては、無生物主語が何らかの事態・行為の「原因」となることを表す場合、*lâzen* 以外の語彙が用いられたことが指摘されている¹²⁾。この指摘からは、19 世紀においてもまだ無生物主語の *lassen* 使役構文の例はきわめて稀であり、そのため学校文法でもとりあげられなかったとも考えられる。

III 「古典派作家の言語」における用例

1. コーパス

本論では「古典派作家」の代表としてゲーテをとりあげ、Projekt Gutenberg (オンライン版) を利用し、小説 (「ゲーテ R」) と自伝 (「ゲーテ A」) という異なるジャンルの作品からサンプルを作成することで、言語使用領域の影響を考察する。また、ゲーテとの比較対象として、シラーの作品からもサンプルを作成した (「シラー」)。「シラー」に関しては、小説と歴史書という異なるジャンルからひとつのサンプルを作成している。以下、本論ではこのデジタル・コーパスを「本コーパス」と呼ぶ。各サンプルの基本情報は、表 1 のとおりである。それぞれの文献における内容的な区切りに合わせてテキストを抽出したため差はあるが、概ね 6 万～7 万語を目安としてサンプルを作成した。該当箇所を示す必要性から便宜的にそれぞれ WM は Goethe (2019)、DW は Goethe (2012)、GD は Schiller (2016)、VE は Schiller (2003) における頁数を挙げているが、本論における引用はすべて本コーパスからである。強調部は、いずれも筆者による。また、日本語としては不自然ではあるが、可能なかぎり *lassen* 使役構文の使用が明確になるよう筆者訳をつけた¹³⁾。

表1：各サンプルの基本情報

	作品名	該当箇所	分量 ¹⁴⁾
「ゲーテ R」	<i>Wilhelm Meisters Lehrjahre</i> (= WM)	第1巻～第3巻	60,972語
「ゲーテ A」	<i>Dichtung und Wahrheit</i> (= DW)	第1部	67,616語
「シラー」	<i>Die Geschichte des Dreißigjährigen Krieges</i> (= GD), <i>Der Verbrecher aus verlorener Ehre</i> (= VE)	GD第1部, VE全文	66,064語 (58,444語 + 7,620語)

用例の算出に関して、Eguchi (1997) は慣用表現を除外している。確かに、使用頻度を考察する際、すでに慣用化している表現をその他の表現と同様に扱うことは問題であろう。しかし、今日の視点からは慣用表現とされる例が、この時代においても慣用表現とみなせるほど頻繁に使用されていたのか判断が難しいため、すべて統計に含めている¹⁵⁾。例えば、*es an etwas fehlen lassen* (DW 94他 欠ける)、*sich etwas gefallen lassen* (GD 16他 甘受する)、*jn. gewähren lassen* (DW 199他 好きなようにさせる) などがそうした例である。なお、1例だけではあるが、以下のように著者自身が慣用表現だと明言している例も含んでいる。本コーパスにはそもそも *laufen lassen* の例がこの1例しかないため、この慣用表現を含んでいることは調査結果に影響していないといえるだろう。

- 1) Sie ließen einen Hasen nach dem andern laufen (dies war unsre sprüchwörtliche Redensart, wenn ein Gespräch sollte unterbrochen und auf einen andern Gegenstand gelenkt werden); [...]. (DW 171 彼らはウサギを次々に走らせた (これは、ある会話を中断して別の話題に話を振るべきときに使う、私たちの慣用句的な言い回しだった))

表2は、それぞれのサンプルにおける lassen 使役構文の1,000語あたりの出現回数を、使用頻度として表している¹⁶⁾。用例数は lassen の数ではなく、lassen とともに用いられた文末不定詞の数である。ゲーテの両サンプルに比べて「シラー」における例がやや少ないが、いずれのサンプルにおいてもおよそ1,000語あたりに1回強の使用例がみられ、各サンプル間に際立った差はない。

2. 「人」主語の用例

中高ドイツ語や現代ドイツ語の例から容易に推測されたことだが、「人」主語の lassen 使役構文の使用例はいずれのサンプルにも豊富にみられた。「人」主語として算出したのは、人物を表す代名詞(例2, 例3)、人物名(例4, 例5)、人物を表す名詞(例6, 例7)、身分や立場を表す名詞(例8, 例9)、形容詞の名詞化(例10, 例11)である。使役構文を考察する際には使役主および被使役主の意思の有無が重要であるため、統計をとる際には主語である使役主が意思を持ちうるかどうかも考察したが、いずれの場合も使役が行われた時点では意思を持っていたとみなせる。また、擬人法などによって、意思を持つものとして表現された人間以外の存在が「人」主語になる例はみられなかった¹⁷⁾。

- 2) Lassen Sie den Vorsatz nicht fahren,

表2：lassen 使役構文の使用頻度 (1,000語あたり)

	分量	用例数	使用頻度
「ゲーテ R」	60,972語	74例	1.21回
「ゲーテ A」	67,616語	87例	1.29回
「シラー」	66,064語	71例	1.07回

- [...]. (WM 198 あなたは, その意図を放棄しないでください)
- 3) Erst muß ich den Hund an Ketten legen lassen, [...]. (VE 22 おれは まず, 犬を鎖につながせなければならん)
- 4) Wilhelm [...] ließ ihre Aufrichtigkeit noch herzlicher und ihr Bekenntnis noch edler werden. (WM 50 ヴィルヘルムは, 彼女の率直さをより心からのものに, 彼女の告白をより気高いものにさせた)
- 5) [...] Tilly läßt einen Theil seines Fußvolks einmarschieren. (GD 141 ティリーは, 歩兵隊の一部を進駐させた)
- 6) Das Frauenzimmer am Fenster läßt Sie fragen, [...]. (WM 91 窓辺の女性が, あなたに質問させるのです)
- 7) Dieser Mann [...] hatte zu Regensburg den Notarius Aprill [...] die Treppe hinunter geworfen oder werfen lassen. (DW 194 この男は, レーゲンスブルクで公証人のアプリルを階段から突き落としたりとか, 突き落とさせたりとか)
- 8) Der Graf und die Gräfin ließen manchmal morgens einige von der Gesellschaft rufen, [...]. (WM 183 伯爵と伯爵夫人はときおり, 朝に一座のうちの何人かを呼びにいかせた)
- 9) [...] der Commandant [...] ließ zu dem Ende die hallische Vorstadt in die Asche legen. (GD 152 指揮官は, 最後ハレ郊外を焼き払わせた)
- 10) Der Alte schwieg, ließ erst seine Finger über die Saiten schleichen,

[...]. (WM 131 その老人は黙り込み, はじめは音をたてずに指を弦のうえで行き来させ)

- 11) Hierauf ließen es die Gottesfürchtigen nicht an Betrachtungen [...] fehlen. (DW 32 これに対して, 敬虔な人々は考察を欠かさなかった)

不定代名詞 *man* は, 意思を持つ特定の「人」を表す主語とは区別すべきだと考えられるが, 今回の調査では「人」主語として計算している(例12, 例13)。そのような例は, 「ゲートR」で8例(1,000語あたり0.13回), 「ゲートA」で12例(同0.18回), 「シラー」で4例(同0.06回)みられ, 決して少ないわけではない。とくにゲートの両サンプルにおいては *man* が主語になるケースが lassen 使役構文全体の1割を超えているため, 別途, 考察が必要かもしれない(「ゲートR」では全体の10.8%, 「ゲートA」では全体の13.8%)。

- 12) [...] man müsse den Kindern nicht merken lassen, wie lieb man sie habe, [...]. (WM 18 ひとは子供たちにかに彼ら愛しているかということを感じさせる必要はなく)

- 13) Man hatte mich zwischen zwei Weibspersonen sitzen lassen, [...]. (VE 24 ひとは二人の女性の間に私を座らせた)

「人」主語の lassen 使役構文の使用頻度を表3に示した。「シラー」における使用例はやや少ないが, それでもいずれのサンプルにおいても1,000語あたり約1回前後といえるだろう。ゲ

表3: 「人」主語の lassen 使役構文の使用頻度 (1,000語あたり)

	分量	用例数	使用頻度
「ゲートR」	60,972語	64例	1.05回
「ゲートA」	67,616語	74例	1.09回
「シラー」	66,064語	55例	0.83回

テの両サンプルにはほぼ差がなく、ジャンルの違いが lassen 使役構文の使用頻度には影響しないことを示唆している。しかし、VE に 8 例のみと用例が少ないためあまり参考にならないが、「シラー」に含まれる両作品では、小説である VE においては 1.05 回 (7,620 語中 8 例)、歴史書である GD においては 0.8 回 (58,444 語中 47 例) と差がみられる。GD における「人」主語の用例が比較的少ないのは、後述するように、使役主である人物が明確な場合であっても無生物主語を用いるケースが多いためであるが、この差はジャンルの違いによるものとみなせるかもしれない。

なお、本論では主語のみを扱っているので深くは立ち入らないが、lassen 使役構文にとって主要な意味である「要求」と「許可」の相違を扱う場合、使役主だけでなく被使役主の意味も考察する必要がある¹⁸⁾。そのため、lassen の目的語の扱いを巡って以下のような例が問題となろう。ここでは、被使役主は蠟で作られた「人形」や劇中の「役割」であり意思を持つ「人」ではないが、本来は人格を有する聖書の登場人物や神話上の女神を指す語であり、発話者も意思を持つ「人」としてこれらの語を用いているように思われる¹⁹⁾。

- 14) [...] ich wurde es erst gewahr, als du eines Abends dir einen Goliath und David von Wachs machtest, sie beide gegeneinander perrieren ließest, [...]. (WM 10 おまえがある晩, ゴリアテとダビデを蠟で作り, 二人に互いに名乗りを上げさせたときに, ようやく私はそのことに気づいたのよ)
- 15) »Sollte es nicht am schicklichsten sein, Euer Exzellenz«, versetzte Wilhelm, »wenn man hierüber sich nicht bestimmt ausdrückte und sie [Minerva] [...] auch hier in doppelter Qualität erscheinen ließe? [...].« (WM 176 「閣下, この点に関しては明確に

せず, ここでも二面性をもったものとして彼女 [ミネルヴァ]に登場させるのが, もっとも良いのではないのでしょうか?」とヴィルヘルムは答えた)

3. 無生物主語の用例

無生物主語の例としては、「物」(例 16, 例 17) および「抽象的概念」(例 18, 例 19), 「出来事」(例 20, 例 21) が主語になる例を算出した²⁰⁾。こうした例は、「人」主語の例に比べれば少なく、とりわけ具体的な「物」が主語となるケースは、「シラー」には一例もみられなかった。その他の例には、「人」の性質や感情などをあらわす「抽象的概念」や「人」がおこなった「出来事」が主語になるなど、無生物主語とはいえ、「人」の影響がつよくみられる。

- 16) [...] als die aufgebundene Serviette einen verworrenen Haufen spannenlanger Puppen sehen ließ. (WM 12 ほどかれたナプキンが, 手のひらサイズの人形のゴチャゴチャしたかたまりを見せたとき)
- 17) Der prächtigste Staatswagen [...] ließ uns ganz bequem Kaiser und König, die längst erwünschten Häupter, in aller ihrer Herrlichkeit betrachten. (DW 204 f. そのきわめて壮麗に飾りたてた馬車は, 私たちにとっても心地よく, 皇帝と王, ながらく望まれていた国家元首たちを華やかな姿で観察させた)
- 18) Meine natürliche Gutmütigkeit ließ mich an einer solchen boshafte[n] Verstellung wenig Freude finden, [...]. (DW 178 私の生来の人の好きが, 私にそのような悪意のある嘘をあまり楽しませなかった)
- 19) Die Lüsternheit der Protestanten nach den geistlichen Gütern ließ sie keine Schonung [...] erwarten. (GD 17f.

プロテスタントたちの教会領に対する貪欲さは彼らに手心を期待させなかった)

20) Die Erschöpfung des Feindes ließ einen nahen Frieden mit Wahrscheinlichkeit erwarten; [...]. (GD 101 敵の消耗は、間近にせまった講和を真実味をもって期待させた)

21) [...] bald ließ ihn Gustav Adolphs reißender Siegeslauf ein Vorgefühl desselben genießen. (GD 116 まもなく、グスタフ・アドルフの快進撃が、彼にその予感を享受させた)

なお、「抽象的概念」には組織や集団を表す名詞も含めたが、それらの組織や集団名がそこに所属する「人」を意味するケースがあるため、磯部 (2002) などでは「人間・機関」を表す主語としてひとまとめに「生物」主語に分類している。前述の例 8 および例 9 („Der Graf und die Gräfin“, „der Commandant“) や、以下の例 22 および例 23 のような身分や立場を表す名詞は「人」主語として扱っているため、両者の区分には問題があるかもしれない。ただし、組織や集団を表す名詞はどのサンプルにおいても 1 例ずつしか確認されておらず、今回の調査に限っては、この分類方法が調査結果に大きな影響を与えることは考えられない (例 24 ~ 例 26)。

22) [...] da der Stallmeister [...] mich auch wohl warten ließ [...]. (DW 157f. その調教師は、私にたっぷり待たせたりもしたので)

23) [...] die Stände dieses so sehr erschöpften Landes ließen es sich mit

Freuden gefallen, [...]. (GD 127 この極めて疲弊した地方の代表者たちは、そのことを甘受した)

24) [...] daß die Gesellschaft [...] die Günstlinge unter den handelnden Personen hochleben ließ. (WM 126 一座は、劇中人物を演じながらお気に入りの人物を祝した)

25) [...] die schalkische Gesellschaft ließ mich durch Pylades aufs inständigste ersuchen, [...]. (DW 179 イタズラ仲間は、ピューラデスをつうじて、とてもしつこく私にさせた)

26) Beide Höfe ließen auch sogleich nach Eröffnung der Erbschaft Besitz ergreifen; [...]. (GD 39 どちらの宮廷も、相続が始まるとすぐに占領させた)

無生物主語の lassen 使役構文の使用頻度を表 4 に示した。いずれのサンプルにおいても使用頻度は低く、1,000 語あたり 0.2 回前後である。用例数が少ないため、サンプル間の差異を論じるのはあまり意味がないだろう。また、湯淺 (2016) においては、無生物が目的語となり、状態・変化を生起させる「原因・理由」を示す語が主語となるケースが多くみられ、無生物主語の lassen 使役構文の 3 分の 1 を占めているが、このような例は本コーパスにはほぼみられなかった (例 27)²¹⁾。また、「人」を目的語として、その人物の「意思的動作・行為」の「原因・理由」を示す語が主語となるケースも少ない (例 28)²²⁾。例 29 は、倉庫に忍び込もうという「意思」をもっていたヴィルヘルム・マイスターがそうした機会に巡りあうという場面である。ここでは、treffen が文全体からみれば「チャンスをつ

表 4：無生物主語の lassen 使役構文の使用頻度 (1,000 語あたり)

	分量	用例数	使用頻度
「ゲート R」	60,972 語	10 例	0.16 回
「ゲート A」	67,616 語	13 例	0.19 回
「シラー」	66,064 語	16 例	0.24 回

かむ」という意味で用いられているため、「行為的動詞」ではなく後述する「認知的動詞」に分類した。

- 27) [...] die wachsame Eifersucht beider Könige und unvermeidliche Handlungscollisionen in den nordischen Meeren ließen die Quelle des Streits nie versiegen. (GD 82 両国王の油断のない妬み心と北方の海域における避けがたい商業的対立が、紛争の火種を決して絶やさせなかった)
- 28) Mein Vorurteil, daß er es doch verstehen müsse, ließ ihn gewähren [...]. (DW 115 彼も分かってくれるに違いないという私の思い込みが、彼に好きなようにさせた)
- 29) [...] einen Augenblick zu benutzen, den mich die Nachlässigkeit der Wirtschaftserinnen manchmal treffen ließ. (WM 16 家を管理する女性たちのいい加減さが、ときどきほくに出くわさせた機会を利用すること)

いずれのサンプルにおいてももっとも多かったのは、無生物主語が「人」目的語をとり、文末不定詞が「心的・認知的動詞」というパターンである²³⁾。「ゲートR」では80% (10例中8例), 「ゲートA」では61.5% (13例中8例), 「シラー」では68.8% (16例中11例)がこれに該当する。上述の例16から例21は、いずれもそうした例である。したがって、本コーパスにおいては、無生物主語の lassen 使役構文は絶対数が少なく、「人」に心理的に働きかけるかなにかを認知させることを表す語が主語になっているケー

スに偏っているといえる。動詞の種類に関していえば、コーパス全体では *sehen* (見る) の5回が最多で、それに *erwarten* (期待する) の3回, *befürchten* (懸念する), *betrachten* (観察する), *genießen* (享受する), *vergessen* (忘れる) の2回が続き、その他の動詞はいずれも1例のみみられた。いずれの動詞もすべてのサンプルにみられるということではなく、それぞれの動詞の使用頻度はテキスト内で語られる内容に依存している。例えば、*erwarten* も *befürchten* も、三十年戦争当時の人々の期待や不安を描くGDにしかみられない。

表5は、無生物主語の用例が lassen 使役構文全体に占める割合を示したものである。湯浅 (2015a) では258例中69例が無生物主語であり、その割合は27%である²⁴⁾。また、算出方法がまるで異なるので単純な比較はできないが、Eguchi (1997) による現代の新聞の例では910例中303例が無生物主語であり、その割合は33%である²⁵⁾。これらに対し、「シラー」においては全体に対する無生物主語の割合が5分の1以上であり、またゲートの両サンプルにおいても約7分の1である。この lassen 使役構文全体に占める割合という観点からは、本コーパスに基づいても「lassen 使役構文は決して「人」主語構文の定式に収まりきれものではない」(湯浅2016:60)といえる。

もっとも、それぞれの用例を詳細にみていくと、湯浅 (2015a 他) と本研究の間には相違がみられる。本コーパスに特徴的なのは、湯浅 (2016) にくらべて無生物主語の lassen 使役構文により強く「人」の影響がみられることである。具体的な「物」を表す語 („Klöppel “[ばち], „Schnellzüge “[急行列車], „Aufsatz “[論文] な

表5：lassen 使役構文における無生物主語の割合

	総数	無生物	%
「ゲートR」	74例	10例	13.5%
「ゲートA」	87例	13例	14.9%
「シラー」	71例	16例	22.5%

ど²⁶⁾が主語になる例はほとんどみられず、また、無生物主語として算出した用例においても使役主としての「人」が明確であるケースがしばしば含まれている。使役主としての「人」が明確な例としては、所有冠詞や属格の形で無生物主語の「所有者」が明示されているケースがあげられる。上述の例28では(間違っ)判断をした「私」の存在が明確であるし、以下の例30では「足を見せたい」という意思を持っていたであろう「彼女」の存在が明確である。したがって、それぞれの主語を「人」主語の *ich* や *sie* に言い換えることができる。また、例31はイスラエル民族の歴史について述べられている箇所、イスラエル民族の始祖を指す「これらの家族」からヨセフが生まれたことを表しているため、同じく「人」主語の *diese Familien* を主語として言い換えることが可能であろう。つまり、これらの例は「人」主語の使役構文の延長上に存在し、「人」主語の場合とは全く別の意味構造」(湯浅2016: 65)を有しているわけではないのである。

- 30) [...] ihr kurzes Röckchen ließ die niedrigsten Füße von der Welt sehen. (WM 93 彼女の短いスカートが、世界でもっとも可愛らしい足を見させた)
- 31) Diese Familienauftritte [...] lassen uns nun zum Schluß noch eine Gestalt sehen [...]. (DW 150 これらの家族の登場が最後に、私たちにもう一人の人物を見させる)

無生物主語の lassen 使役構文に使役主としての「人」が明示されているケースは、上述の例19から例21、そして以下の3例など、「シラー」に多くみられる。VEにはそもそも無生物主語の例がひとつもなかったため、厳密に言えばGDに多くみられる傾向である。しかし、この傾向は lassen 使役構文の特徴ではなく、シラーが歴史的事実を語る際に、名詞文体によって一文

中にできるだけ多くの情報を詰め込もうとする「圧縮報道文体」(Straßner 1999: 37)を用いた結果だと思われる。例えば、無生物主語を動詞化し、例32を „Sie konnten keinen Großmuth, keine Duldung erwarten, weil sie von den Protestanten gehasst wurden.“ (プロテスタント信者に憎まれていたので、彼らは寛容や許容を期待できなかった)と表現するよりも、より短い文で同様の内容を表すことができる。

- 32) [...] ließ sie [...] ihr Haß keine Großmuth, keine Duldung erwarten. (GD 18 彼ら[カトリック信者]に彼ら[プロテスタント信者]の憎悪は寛容や許容を期待させなかった)
- 33) Der unbesonnene Eifer der Jesuiten [...] ließ sie in jedem gleichgültigen Schritt der Katholischen gefährliche Zwecke vermuthen. (GD 30 イエズス会士たちの無思慮な熱意は、カトリック信者たちのなんとということのない行為にさえも、彼らに危険な意図を想像させた)
- 34) [...] die blinde Mordbegier der kaiserlichen Soldaten ließ sie als rettende Engel betrachten. (GD 142 皇帝軍の兵士たちの盲目的な殺人欲は、彼らを救いの天使であるかのようにみなさせた)

しかし、これらと同様の構文であっても、被使役主自身に「内在する心的生理的作用・状態」(湯浅2016: 68)が文主語であり使役主となっている場合は、「人」主語への言い換えはできない。なぜなら、被使役主には「コントロールできない行為・動作」(Ebd.)が使役主によって引き起こされていることが表現されているからである。例えば、以下の3例は「人」主語の *er* や *ich* に言い換えることはできない。

- 35) Seine Jugend ließ ihn reiche Freuden

genießen, [...] (WM 11 彼の若さが,
彼に大いなる喜びを享受させた)

- 36) Die Beschämung, der Frostschauer, das Bestreben, mich einigermaßen zu bedecken, ließen mich eine höchst erbärmliche Figur spielen; [...] (DW 67 「ぼく」が感じていた) 恥ずかしさや寒さ, 少しでも身を隠そうという努力が, ぼくにみともない格好をさせた)

- 37) Seine natürliche Herzhaftigkeit ließ ihn nur allzuoft vergessen, [...] (GD 121 彼の生来の大胆さが, あまりにも頻繁に彼に忘れさせた)

このような例は、湯浅 (2016) においては無生物主語の lassen 使役構文全体の 4 分の 1 を占めている²⁷⁾。本コーパスにおいても、表 6 に示したように (用例数は少ないが) 各サンプルにおける割合は高く、「ゲート R」および「ゲート A」で約 3 分の 1, 「シラー」でも 5 分の 1 弱を占める。被使役主に「内在する心的生理的作用・状態」が主語となるケースは、「古典派作家の言語」においても、無生物主語の lassen 使役構文を考察するうえで重要な要素だといえる。しかも、これらの例は「人」主語に置き換えられないという点で、冒頭にあげた「無生物主語 lassen 使役構文」には、「人」主語の場合とは全く別の意味構造を想定する必要がある」(湯浅 2016 : 65) という主張にふさわしい用例とみなせる。

IV おわりに

今回調査した「古典派作家の言語」に関しては、いずれのサンプルにおいても無生物主語の

例が一定数みられた。マンの用例も、こうした先駆者の文章に影響を受けていたのかもしれない。ただし、意思を持つ使役主としての「人」が明示されているケースが多く、したがって、本コーパスにおける無生物主語の lassen 使役構文の多くは、「人」主語構文からの拡張」(湯浅 2018 : 4) とみなせる。この傾向はとくに「シラー」に顕著であったが、これはおそらくは「圧縮文体」が用いられたためにみられたもので、lassen 使役構文の特徴ではないと考えられる。その一方で、被使役主に「内在する心的生理的作用・状態」が主語となっており「人」主語には置き換えられない例も、無生物主語の lassen 使役構文のうち無視できない割合を占めていた。この点から、今回の調査結果は、無生物主語の lassen 使役構文に「人」主語の場合とは全く別の意味構造」(湯浅 2016 : 65) を求める湯浅 (2016) の主張を裏づけているといえるだろう。

- 38) [...] ein sanft fließendes Wasser, [...]
das in seinen klaren Tiefen eine große Anzahl von Gold- und Silberfischen sehen ließ, [...] (DW 59 その澄んだ水底に多くの金や銀の魚を見えさせていた穏やかに流れる水)

- 39) [...] mit Blumen, [...] die, [...], den vorgezeichneten Grundriß leicht verfolgen ließen. (DW 61 前もって描かれた図面を容易にたどらせる花々で)

総じて、サンプル間には大きな差がみられなかったが、「ゲート A」においては以下のような発見もあった。同サンプルには、ゲートが少年時代に好んで語ったとされる童話「新パリス」

表 6 : 無生物主語の lassen 使役構文における「内在する心的生理的作用・状態」の割合

	用例数	心的生理的作用・状態	%
「ゲート R」	10 例	3 例	33.3%
「ゲート A」	13 例	5 例	38.5%
「シラー」	16 例	3 例	18.8%

Oct. 2020

「古典派作家の言語」における無生物主語の lassen 使役構文

が含まれているのだが、この4,817語からなるパートには、6例のlassen使役構文がみられ、そのうち半数が無生物主語である(例36, 例38, 例39)。1,000語あたりの使用頻度は1.25回とそれほど高くないが、無生物主語が占める割合が50%という点は注目に値する。用例数が3例だけでは、偶然このような表現が続いたとも考えられるが、その一方で、ゲータが「童話的な表現」として無生物主語を意図的に多用した可能性も指摘しうるのではないだろうか。ジャンルごとの使用頻度の差に関しては、今後より多様なジャンルからコーパスを作成することで明らかにしていきたい。

注

- 1) 高見2011: 128以下, 133以下参照。なお、日本語の使役表現の機能として、高見(2011)はこの他に「人間関係に基づく指示」使役と「責任」使役とを挙げている。前者は使役主と被使役主の人間関係を前提として特別な強制や説得が必要とされない使役であり、後者は引きおこされた事態に主語が責任を感じている場合の使役表現である。高見2011: 129以下, 134以下参照。
- 2) 後述のように、*machen*を用いても表現することができる。Vgl. Enzinger 2010: 6.
- 3) 井出2013: 101以下参照。
- 4) 湯浅2015a: 9以下, 湯浅2018: 3以下参照。
- 5) 例としては、*lassen*のケースでは„Der Gärtner läßt den Baum wachsen.“(庭師は木を育てた)などが、*machen*のケースでは„Dein dummes Gesicht macht uns nur lachen.“(おまえのまぬけ面はおれたちをとにかく笑わせる)が挙げられている。Vgl. Zifonun u. a. 1997a: 705f.
- 6) 湯浅2015a: 7参照。
- 7) Vgl. Eguchi 1997: 152.
- 8) Vgl. Eggers 1977: 128f.; Hosokawa 2014: 43f., 118f.
- 9) Vgl. Hildebrand 1930: 114f.; Hosokawa 2014: 49f.
- 10) 湯浅2015a: 9以下参照。
- 11) ハイゼの文法書における「古典派作家の言語」の影響を示す例としては、*ö*の表記を巡る記述があげられるだろう。ハイゼは、*ö*を*oe*と記すより古い表記法が固有名詞としては残っていることを紹介し、「Goetheも自分の名前をGoetheと書いている」(Heyse 1838: 230)と述べている。
- 12) Vgl. Ide 1996: 82, 168, 182f., 188f., 259; 井出2013: 105, 108以下参照。
- 13) ただし、和訳に際しては、WMおよびDW, GDに

関しては以下の文献を参考にしてている。前田敬作・今村孝訳(2003)『ゲータ全集7 ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』新装普及版, 潮出版社; 山崎章甫・河原忠彦訳(2003)『ゲータ全集9 詩と真実(第一部・第二部)』新装普及版, 潮出版社; 渡辺格司訳(1988)『三十年戦史 第一部』岩波書店。

- 14) 技術的な問題から、サンプルの分量はWord 365の校閲機能を利用して算出した。したがって、分離動詞の計算方法などに問題を含んでいる。
- 15) 本論とは違いEguchi(1997)は*lassen*を含む文の数を算出しているため、単純な比較はできないが、彼が調査した2,417文中、不定詞を伴う*lassen*が含まれている40文が慣用表現として除外されている。ただし、これらの例には使役構文だけではなく、本論では扱っていない受動構文も含まれていると考えられる。Vgl. Eguchi 1997: 155. 湯浅(2015a, b)においても慣用表現は統計に含まれている。湯浅2015a: 20, 21, 湯浅2015b: 101, 104, 106, 112参照。
- 16) 本論では*lassen*受動構文や*lassen*単独での使用例は算出していないが、*lassen*の使用例全体から使役構文の使用傾向を探ることも可能だろう。湯浅2015a: 5以下参照。
- 17) 意思を持たない「人」主語として想定されたのは、特定の人物を指す語が主語であっても、その人物が昏睡状態にある場合などである。また、意思を持つ人間以外の存在としては、長靴をはいた猫のような擬人化された動物などが想定された。湯浅(2015a)では、*Gott*(神)が「人」主語と合わせて数えられている。湯浅2015a: 8以下参照。
- 18) 井出2013: 101参照。
- 19) 湯浅(2015b)では、*lassen*の目的語として用いられた*Kater*(雄猫)が「人」に分類されている。湯浅2015b: 91参照。
- 20) 湯浅2016: 60参照。
- 21) 湯浅2016: 71, 73参照。
- 22) 湯浅2016: 77以下参照。
- 23) 湯浅2016: 77以下参照。
- 24) 湯浅2015a: 7参照。
- 25) Eguchi(1997)におけるグループK(再帰代名詞を含まない文)のみの数値であり、*lassen*使役構文全体の割合ではない。Eguchi(1997)は*lassen*が含まれる文の数を算出しており、また使役構文と受動構文の区分が湯浅(2015a)や本論とは異なる。なお、彼は受動構文に関連して、客観的報道をおこなう新聞においては文学作品よりも無生物主語が多く用いられると指摘している。このことは、使役構文に関してもいえるかもしれない。Vgl. Eguchi 1997: 158f., 164.
- 26) 湯浅2016: 74参照。

27) 湯浅 2016 : 68 以下参照。

一次文献

- Goethe, Jonann Wolfgang (2012 [1811-1833]) : *Dichtung und Wahrheit*. Stuttgart. (= <https://www.projekt-gutenberg.org/goethe/dichwahl/dichwahl.html> [Stand: 18.3.2020])
- Goethe, Jonann Wolfgang (2019 [1795]) : *Wilhelm Meisters Lehrjahre*. Stuttgart. (= <https://www.projekt-gutenberg.org/goethe/meisterl/meisterl.html> [Stand: 18.3.2020])
- Schiller, Friedrich (2003 [1786]) : Der Verbrecher aus verlorener Ehre. In: Ders.: *Der Verbrecher aus verlorener Ehre und andere Erzählung*. Stuttgart. S. 5-33. (= <https://www.projekt-gutenberg.org/schiller/verbrech/verbrech.html> [Stand: 2.4.2020])
- Schiller, Friedrich (2016 [1792]) : *Die Geschichte des Dreißigjährigen Krieges*. North Charleston. (= <https://www.projekt-gutenberg.org/schiller/30jkrieg/30jkrieg.html> [Stand: 2.4.2020])

二次文献

- Becker, Karl Ferdinand (1852) : *Schulgrammatik der deutschen Sprache*. 7. Aufl. Frankfurt a. M.
- Eggers, Hans (1977) : *Deutsche Sprachgeschichte*, Bd. 4. Reinbek bei Hamburg.
- Eguchi, Yutaka (1997) : Zu lassen-Konstruktionen im Zeitungsdeutsch. Bilanz einer computergestützten Korpusanalyse. In: Hokkaido Universität: *Language and culture* 32. S. 151-170.
- Enzinger, Stefan (2010) : *Kausative und perzeptive Infinitivkonstruktionen. Syntaktische Variation und semantischer Aspekt*. Berlin.
- Heyse, Johann Christian August (1838) : *Theoretisch-praktische deutsche Grammatik oder Lehrbuch der deutschen Sprache, nebst einer kurzen Geschichte derselben. Zunächst zum Gebrauch für Lehrer und zum Selbstunterricht*. Bd. 1. 5. Aufl. Hannover.
- Hildebrand, Rudolf (1930) : *Vom deutschen Sprachunterricht in der Schule und von deutscher Erziehung und Bildung überhaupt*. 19. Aufl. Leipzig.
- Hosokawa, Hirofumi (2014) : *Zeitungssprache und Mündlichkeit. Soziopragmatische Untersuchungen zur Sprache in Zeitungen um 1850*. Frankfurt a.

M.

- Ide, Manshu (1996) : *Lassen und läzen. Eine diachrone Typologie des kausativen Satzbaus*. Würzburg.
- Metzler Lexikon Sprache* (2016) 5. Aufl. Stuttgart. (= MLS)
- Polenz, Peter v. (1999) : *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart*. Bd. 3. Berlin u. a.
- Straßner, Erich (1999) : *Zeitung*. 2. Aufl. Tübingen.
- Takada, Hiroyuki (1998) : *Grammatik und Sprachwirklichkeit von 1640-1700. Zur Rolle deutscher Grammatiker im schriftsprachlichen Ausgleichsprozess*. Tübingen.
- Zifonun u. a. (1997a) : *Grammatik der deutschen Sprache*. Bd. 1. Berlin u. a.
- Zifonun u. a. (1997b) : *Grammatik der deutschen Sprache*. Bd. 2. Berlin u. a.
- 磯部美穂 (2002) 「lassen 構文における不定詞の意味上の主語について—「lassen+認知動詞」の場合」大阪市立大学『セミナリウム』24号, 73-84頁。
- 井出万秀 (2013) 「構文の変遷(2) 使役構文とその周辺」高田博行・新田春夫編『講座ドイツ言語学第2巻 ドイツ語の歴史論』ひつじ書房, 91-115頁。
- 高見健一 (2011) 『受身と使役 その意味規則を探る』開拓社。
- 細川裕史 (2013) 「大衆紙のドイツ語 (19世紀) 三月革命は書きことばを大衆に届けたのか？」高田博行・新田春夫編『講座ドイツ言語学第2巻 ドイツ語の歴史論』ひつじ書房, 249-273頁。
- 湯浅英男 (2015a) 「[人] 主語のドイツ語 lassen 使役構文の用法—トーマス・マンの『ファウスト博士』の例文を用いて—(その1)」神戸大学『国際文化学研究』44号, 1-27頁。
- 湯浅英男 (2015b) 「[人] 主語のドイツ語 lassen 使役構文の用法—トーマス・マンの『ファウスト博士』の例文を用いて—(その2)」神戸大学『国際文化学研究』45号, 89-116頁。
- 湯浅英男 (2016) 「無生物主語のドイツ語 lassen 使役構文の用法—トーマス・マンの『ファウスト博士』の例文を用いて—」神戸大学『国際文化学研究』47号, 59-88頁。
- 湯浅英男 (2018) 「言語研究における「分かりやすさ」と使用実態—ドイツ語 lassen 使役構文を手掛かりに—」神戸大学近代発行会『近代』118号, 1-25頁。

(2020年7月3日掲載決定)